

## 《批評》

## 島本理生『一千一秒の日々』——人と人とのつながりを描く物語

松下 彩 MATSUSHITA, Aya

## 【1】

島本理生はさまざまな形の恋愛を描いてきた作家である。デビュー作の『シルエット』（二〇〇一）では高校生の「私」と、女性の身体に嫌悪感を覚えてしまう同級生との恋愛のようすが描かれ、『ナラタージュ』（二〇〇五）では大学生の泉が高校時代の恩師葉山と再開したことで再び想いを募らせていくようすが描かれた。また、最新作の『よだかの片想い』（二〇一三）では、顔にあるアザをコンプレックスに感じ、そのことから恋愛を諦めていたアイコが映画監督の飛坂に想いを寄せるようすが語られている。このように島本理生は作品内で恋愛を描くことが多く、そのために作品は「恋愛小説」というくくりで紹介されている。たとえば、連作短編集『一千一秒の日々』（二〇〇五）は文庫本（二〇〇九 角川文庫）裏表紙の紹介文で、「いろいろなままならないことはあるけれど、やっぱり恋したい、恋されたい——『ナラタージュ』の島本理生がおくる傑作恋愛小説集」と紹介されている。ここでは『一千一秒の日々』は、「恋」に対する高揚感をもたらしてくれるような「恋愛小説」として紹介され

ていることが分かる。

先に述べたとおり島本の作品は「恋愛小説」として読まれることが多い。その一方で、それとは違った視点からも読み解かれている。青山純一は「雨季の予感 島本理生『一千一秒の日々』マガジンハウス」（『群像』二〇〇五年九月）の中で、島本の作品がいつも問いかけていることとして「孤立した個体ではなく多様な関係と性を持つ人間として、しかし社会の一般性が要求するのとは別なリズムで、私たち現代人にはいかなる性的な成長が可能か」という問題があるのだと述べている。また、『一千一秒の日々』について「登場人物達はそれぞれ自分の性に対して異和を抱きながら、その異和を通じて自己と世界との間に独自の成長のリズムを発見しようとする。」と指摘している。岩瀬成子は「おもしろい本が読みたい 島本理生『一千一秒の日々』マガジンハウス 発光する言葉が胸をうつ」（『ウフ』二〇〇五年八月）において「この連作短編集には、一人のひとと分かれあうことが、あるいは分かれあえないことが、軽やかにまた重く、悲しく、喜ばしく描かれている」と述べている。

このように指摘されるのはどのような部分だろうか。具体的に場面を

挙げつつ、『一千一秒の日々』は「恋愛小説」なのかどうかを考えていき  
たい。

## 【2】

『一千一秒の日々』は連作短編集であり、各話ごとに語り手が変わる。  
以下、収録された順に読み解いていく。また、その際注目するのは各  
話で描かれている恋愛のようすである。

### ①「風光る」（『ウフ』二〇〇四年三月号）

大学生の真琴が語り手となり、恋人である哲と別れるまでの様子を述  
べる。

二人は四年間付き合っている恋人同士で、お互いのことを知り尽くし  
ていたが徐々にすれ違いがうまれてきた。哲に誘われて遊園地を訪れた  
真琴は、哲とのこれまでの思い出を一つ一つ回想していく。次の朝、二  
人は別れることを決意する。

晴れたら次の土曜日に遊園地に行こうと言われた。

思わず煮ていた豚肉の灰汁<sup>あじ</sup>を取る作業を中断して、振り返った。

哲はテレビの前で黙々とゲームをしている。いつもと変わらない横  
顔だった。

「どうしたの、急に」

そう尋ねると、彼はゲームをする手を休めて

「嫌なら、べつにいいけど」

「嫌じゃないけど、珍しいなって思っ」

説明を求めたつもりだったけど、彼がなにも言わずにまたテレビ

の画面に集中してしまったので、私も鍋<sup>なべ</sup>のほうに視線を戻した。

これは冒頭で交わされる会話である。真琴が説明を求めるつもりで言  
った言葉は哲に流されてしまっており、二人の会話に微妙なすれ違いが  
うまっている。また、この後遊園地に向かう道中で、真琴は哲の穏やか  
な表情を見て、

その穏やかな表情を見ていたら、私の胸はなぜか嬉しさよりもざ  
わざわと大量の虫が通り抜けていくような音をたてた。

と述べており、二人の関係がもうすぐ終わりそうだということを真琴が  
無意識に自覚し始めていることが分かる。

一方で、真琴が哲をまだ好きでいることが分かるようすも度々描かれ  
る。

電車は週末とは思えないほどに空<sup>す</sup>いていた。哲と二人で体を寄せ  
合って座るとき、いつも大げさなくらい安心してしまふ。電車の中  
で時折、押し寄せる小刻みの振動がお互いの右腕と左腕、右肩と左  
肩を軽く打ち付けてそのたびに服の擦<sup>す</sup>れる音がした。

真琴は哲と一緒にいるときに大きな安心感を得ており、決して二人の  
仲がひどく悪くなってしまうわけではないことが分かる。また、遊園  
地に着いた後で真琴が亡くなった祖母との思い出を語ったときに次のよ  
うな描写がある。

そう言って椅子から立ち上がったら、哲もつられたように立ち上がった後で、かなり遅れて私の頭を撫でた。子供や小動物に興味がないという顔をしながら、彼は通りすがりの子供をあやしたり（むしろ驚かせたりと言わなければならないけれど）、そういう小さなものを愛でているような触れ方をする。そういうときの彼の手の動きは柔らかない。

この場面では哲の不器用な優しさが示され、哲も真琴のことを嫌いになつてはいないことが分かる。それと同時に、真琴はそういう哲の分かっていく優しさをよく理解していることが読み取れる。

遊園地の帰りに二人はホテルに泊まり、かつて一緒に行った花火大会の思い出を語り合う。次に挙げるのは、翌朝の二人のやりとりである。

マンションの前まで来たとき、私が楽しかったと告げて笑うと、哲はまっすぐな目でこちらを見ていた。泣きも笑いもせずに、出会ったときに一目でひかれた、あのなにを考えているのだから分らない顔で。

そんな顔をしてダメだよ、と私はうつむいて思った。四年という月日はけっして短くはないのだから、もうどんなに冷静な表情をしても考えていることなど手に取るように分かってしまう。

「やっぱりダメみたいだ」

哲は言い、私はまだ反論しなかったけれど、息が詰まってなんの言葉も出てこなかった。

真琴は哲のことを「どんなに冷静な表情をしても考えていることなど

手に取るように分かってしまう」くらいよく理解している。哲の不器用な優しさにも気がついてるし、哲も真琴に対してそういう優しさを示してきた。それでも哲は「やっぱりダメみたいだ」と述べる。二人がお互いのことを決して嫌ってはいないことは今までの描写からも明らかなのだが、それでも二人のすれ違いは決定的なものになってしまっており、関係が回復することはないのである。

このように、「風光」では、お互いのことをどれだけ分かっているか、相手（相手の想い）を受け入れ続けることが困難であることが示されている。

## ②「七月の通り雨」(『ウフ』二〇〇四年五月号)

ここでは真琴の友人・瑛子が語り手となる。

瑛子は真琴とは高校時代からの同級生で、真琴に好意を抱いている。ある日、大学の劇団の舞台に立った瑛子の姿を見て、遠山という男性が交際を申し込んできた。大きな花束を渡された瑛子は、迷惑だとはつきり伝えるが、それ以来遠山は飽きもせず瑛子をデートに誘い続ける。自分は真琴が好きだという事実と、他の人とうまく付き合うことができるのかも分からないということを伝えると、遠山はそれでもいい、友達から始めようと言うのだった。

高校の修学旅行で自分の気持ちに気がついた瑛子は次のように述べる。

昂揚感こうようかんと深い絶望が一緒に溶け合って体の底へ沈んでいく。泣きたいののに、泣くほどの強さはない。だけど平気なわけでもない。むくわれないんだ、と自覚した頭の中是一片の曇りもなく、明るいほ

どだった。

翌朝、食堂で会った真琴は何事もなかったかのように笑って、おはよう、と片手を振った。顔を洗ったばかりなのか、前髪がうっすら濡れて光を集めていた。

彼女のとなりに腰をおろすと、同じ席に着いた女の子たちは少し離れたところに座っている男の子たちの話で盛り上がっていた。昨夜のうちに二組のクラスメイトが付き合い始めたと知って驚いた。

その話の延長でふと、瑛子が男だったら付き合い合うという一言を真琴が漏らしたのだった。

ほかの女の子たちはちよつとだけ笑って、すぐ話はべつの話題へと流れた。

私は真琴の言葉が嬉しかった。けれど、あのタイミングで私もし男の人だったなら、きっと彼女はあんなことは言わなかっただろう。

それが私にとってなによりも残酷なことだったと、真琴はきつと気付いていない。

瑛子が真琴を好きだと気がついたのは高校時代であり、同時に決して叶うことのない想いだということを感じていることが分かる。ただ、「女性」が好きなわけではなく、あくまで自分を理解してくれる、そして自分も相手を理解できていると感じられる人が真琴であった、という点が好きになった理由として挙げられる。

子供のときから人付き合いが苦手だった。それなりに親しくなることはあっても、一步、先に踏み込むことができない。それこそ真

琴ぐらいだ。「……」こんなふうに夜を一人で過ごし、そのほかの間は真琴と会う。それだけで私の日常は十分すぎるという気がして、他のことはすべて余計なことに思えてならないのだった。

そして瑛子は遠山に、自分が好きなのは真琴であることを伝える。

「高校のときに女友達のことを好きになりました。だけどその恋には始まりすらなかった。だから終わることもできなくて、今ではたとえ叶わなくても、彼女がずっと近くにいればそれでいいような気さえするんです」

この話を聞いた後、遠山はどうしても自分ではだめなのかと確認をする。次に挙げるのはその質問に対する瑛子の返答である。

「むしろ自分が他人と付き合いことができるかどうか分からない。深くかかわることで、お互いどうしても理解し合えない部分を見つけてしまったり、期待しすぎて逆に失望したり。そういうのが嫌なんです」

本当は性別は関係ないのだ。お互いに認め合つて必要としているなら。そういうこの世でたった一人の相手になれるなら。

この瑛子の発言に対して遠山は次のように述べる。

「相手が変われば付き合い方も変わるし、一度、失望することがあってもそこから学習して、さらにより良い関係が生まれることだっ

である。始める前から決めつけるのはつまらないよ。べつに恋人じゃなくてもいい。俺はあなたに会えるだけで楽しいから。だからまたこんなふうに出かけたりしたいんだ。その後でやつぱり違うと感ぜたら、それは仕方ないから」

この会話の中では男女間の恋愛の話を越えた、より大きな人間関係の話がされているように感じられる。瑛子は「子供のときから人付き合いが苦手」であるという説明がなされており、物語の中で真琴さえいればいいというような発言も見受けられる。

つまり瑛子が抱える問題とは、叶わない相手を想い続けているということにあるのではなく、本当は他者と関わりをもつことを恐れているという点にあるのだ。この会話で出てくる「他人と付き合うこと」「付き合い方」という言葉は、話の流れ上、恋愛の意味での「付き合う」なのだろうが、他者との関わりを恐れ、拒絶する瑛子の発言であることを踏まえれば、人間関係の意味での「他者と付き合うこと」と読むこともできる。遠山の「べつに恋人じゃなくてもいい」という言葉も、恋愛関係にこだわらず、一人の人間としてこれからも瑛子と「付き合っていく」ことを望む言葉であると考えることができる。

「七月の通り雨」では、自分のことを「不完全」だと言う瑛子を、恋愛要素を抜きにして受け入れようとしている遠山の姿が描かれているのだ。

### ③「青い夜、緑のフェンス」(『ウフ』二〇〇四年七月号)

「七月の通り雨」でバーの店員として登場した針谷という人物が語り手となる。

針谷は自分が太っていることに強いコンプレックスを感じていた。幼なじみで美少女の一紗に告白されるが、それも「錯覚だ」と言って相手にしない。しかし傷ついた一紗の表情を見て自分の言葉を後悔する。そして再び一紗の自分に対するまっすぐな想いを聞いたことで、自分が一紗から安心感をもらっていることに気がつくのだった。

針谷が一紗に、昔付き合っていた女の子となぜ別れたかについて語る場面がある。

「僕のことをそんなに好きだったというのが、どうしても信じられなかったんだよ」

どうして自分なのだ、といつも心のどこかで感じていた。正直、別れ際に泣いている彼女の姿を見たときにも冷静さが勝ってしまった。彼女の過不足に対して自分が引き受けられるものも与えられることも、なに一つないように思えた。

自分の容姿に強いコンプレックスを持つ針谷は、幼なじみで美少女の一紗に告白されるが、その感情も「錯覚だ」と言ってしまう。次に引用したのは、一紗が彼氏と言いつ争いになる場面である。

「なんでだよ、暑苦しいって言ったらこのデブのほうがよほど暑苦しいだろう」

「なんで、なんでって子供かよ。針谷はたしかに太ってるし、夏は水浴びしたみたいに汗をかくし、背中にはニキビ跡があるし糖尿病だけどあんたよりもよっぽどいろんなことを分かっているの。とにかく

く、あんたみたいな馬鹿はもうウンザリなの。ぐだぐだ言っていないで、いまずぐに別れて」

最後に針谷は自分のことを好きだと言う一紗に対して「どうして自分なのだ」と思いつつ次のような感情を抱く。

少なくともこいつは僕から勝手に自分の欲しいものを得ているのだらうと感じる。それが妙な安心につながっていることは自分の間、気付かないふりをしようと思いつつながら、僕は一紗をカウンターに案内して椅子を引いた。

針谷はコンプレックスに囚われ自分を受け入れることができず、そのせいで自分のことを好きだと言ってくれる人達のことを信じることもできなかった。しかし一紗の正直な言葉を聞いたことで、自分のコンプレックスをまだ持ち続けつつも、自分を少しだけでも肯定し始めていることが分かる。

「青い夜、緑のフェンス」では自分を受け入れることができなかった針谷が、自分を受け入れてくれる一紗のおかげで一歩前に進むことができたようすが描かれているのである。

#### ④「夏の終わる部屋」(『ウフ』二〇〇四年九月号)

語り手となる長月は「青い夜、緑のフェンス」の登場人物、針谷の友人である。

長月は喘息に苦しんだ過去の経験から「何人いても、死ぬときは一人」という考えを持っており、他人に執着しない人物である。恋人となつた

操が浮気をしていることを知った長月は操と別れるが、最後には本当は操が父親の暴力におびえ、精神的に不安定であつたことが分かる。

長月は、喘息の辛さについて次のように語る。

「喘息の発作つてたし息が吐けないんだよね。すごく苦しいんですよ」

「苦しいのもあるけど、精神的にすごくあせる。手足を縛られて口を塞がれたような、自分にはどうしようもできない力で押さえ付けられてる感じがした。まわりの人間が急に遠くなって、自分一人が今にも死にそうに苦しくて」

なにやら痛むと思つて腕を見ると手首のところにくっすらと赤いアザができていた。

「何人いても、死ぬときは一人だつて思つてた」

「何人いても？」

「そう。何人いても誰がいても死ぬときは一人。ものすごく健康な人間のすぐ横で自分が死ぬこともあるんだつて、当たり前だけど、そう実感してた」

長月は喘息で苦しんだ経験から、自分ではどうしようもない肉体的な痛みについてよく分かっている。また、死ぬときは誰でも一人なのだという考えを持っており、他人に執着しようとしなない。

一方、操は長月に対して執着するようになっていく。女性からかかってきた電話に長月が出るだけでも、操は嫉妬心をあらわにする。

振り返ると、強<sup>こ</sup>ばった表情で操がこちらを見ていた。誤解されないようにすぐ西山ちえみの名前を出したけれど、彼女の顔はそう告げたことでさらにいつそう追い詰められたような表情を見せた。

「どうして西山さんと仲良くしてるの」

そう問い詰められ、思わずあつけに取られた。

「べつに気にすることじゃないって。彼女とは操だつて友達なんだし、ただ、今度みんなで遊ぼうっていう誘いなんだから」

「べつに友達じゃないわよ。同じサークルに入ってるだけで、学年も違うし。あの夜だつて、たまたま人数合わせで呼ばれただけで普段はそこまで親しくしてないもの。なのに、どうして私と長岡君が付き合ってるって知っていてこんな時間に電話してくるの」

長月が他人に執着しない人間なのに対し、操は長月に強く執着している。特にそれが分かるのが、操がまだ前の彼氏と一緒に暮らしているということを聞いた後、長月が操に別れを切り出す場面である。どうしても長月と別れたくない操は、何をすれば許してくれるのかと長月に問いかける。

「これなら、許せるかも知れない」

ハサミを受け取った彼女は次の言葉を持つように俺を見た。

「本当に俺と一緒にいたいなら、今ここで坊主にしろよ。それ以外に許せる方法は思いつかない。それが無理ならでていく」

自分で宣言しておきながら、なんて無茶を言ってるのだらうとあきた。操はしばらくあつけに取られたような顔をしていたが、やがて唇の隙間から息を漏らして困惑したように小さく笑った。

俺は、ごめん、と言つて首を横に振った。

「だからもうやめような。楽しかった」

そう言つてふたたび玄関のほうへ向かったとき、背後でなにか軽いものが落ちる音がして、まさかと思つて振り返った。

左耳周辺の髪が、根元の数センチを残して床に散らばっていた。俺が絶句していると、操はなにを驚いているのだらうという顔をした。

操は自分のことなど少しも気にかけず、ただなんとか長月にそばにいてもらおうとしていることが分かる。逆に長月はもとも他人に執着しない性格であり、操の態度に困惑を隠しきれないでいる。

この後、長月は操の体に自傷行為の痕を見つけ、どうしてそんなことをするのかと問い詰める。操がそのような行動をとる理由が、長月には理解できず、ついに二人は別れることになる。

そして、操が情緒不安定だった理由は、父親の暴力を恐れていたからであつたと最後に分かるのだ。

「あの子、春の新歓コンパのときに松葉杖<sup>まつばづえ</sup>ついてたんだよね。そのときは自転車で転んだなんて笑ってたけど、ほかの一年生に聞いたら、本命だった国立に失敗してお父さんに歩道橋から突き落とされたつて。どっちが本当の話かは分からないけど」

操の心のバランスが不安定な理由は家庭にあつたことが分かる。また、長月は操の自傷行為の痕に気がつき、実家で休むようにと言うのだが、そもそもその操を追い詰めていたのは実家にいる父親だったのである。

操が長月に対してあれほどの執着心を見せたのは、自分と似た孤独な心を持つ長月にそばにいて支えて欲しいと強く望んでいたからではなかっただろうか。

知っていたなら、肉体的な痛みなら、俺だって嫌というほど理解できたのに。何人いても死ぬときは一人だと気付いていたのは俺だけではなかったのではないか。

ここでは、自分が操を理解し救ってあげることができなかったという長月の後悔が表れている。操は親から受け入れられないことに苦しんでおり、その苦しみを分かってくれそうな長月に執着していたのだと考えられる。「死ぬときは一人」という考えは、自分ではどうにもならない肉体的な痛みを経験したことがある二人ならば分かり合うことができたのだろう。しかし結局、長月は操を受け入れることはできなかったのである。

このように「夏の終わる部屋」では、同じような考えを持ちながらも、完全には相手を受け入れられない人々の姿が描かれている。完全に理解し合うことの難しさや、本当の意味で相手を受け入れることの難しさが描かれているとも言えるだろう。

##### ⑤「屋根裏から海へ」(『ウフ』二〇〇四年十一月号)

「風光る」の語り手であった真琴の、友人であり元恋人の加納が語り手となる。

加納は家庭教師のバイトをしており、生徒の姉である沙紀に言い寄られるが、強く反発する。沙紀は彼氏の浮気に苦しんでおり、彼氏への当

てつけに自分を選ぼうとしたに過ぎないのだと、加納は沙紀に言い切る。しかし後になって、正しさばかりを主張するような自分の言い方は果たして正解だったのかと悩む。そんな折に真琴と会い、励まされたことで心は軽くなり、二人で一緒に気ままな旅に出ることを約束し合う。

加納は沙紀のことを次のように語る。

自惚<sup>うぬぼ</sup>れかも知れないが、少し前から彼女が僕になにかしらの救いを求めているのではないかという気がしていた。僕と弥生ちゃんのやり取りをながめる視線や、玄関の前でこちらに向かって手を振る時間の長さ、そういう態度の端々に滲<sup>にじ</sup>み出てくる彼女の淋しさが、ゆっくりと近づいてきて僕の腕を掴<sup>つか</sup>んでいるようで、いたたまれない気持ちになる。

それでもどうすることもできないのは、弱っている人にはできるだけ優しくしたいと思うと同時に、自分の中の道徳や倫理は絶対に曲げたくないと僕自身が決めているからだ。そしてそれはきっと、どちらも彼女の求めていることとは微妙に違うのだった。

沙紀のことを救ってあげたいと思いつつも、「自分の中の道徳」を曲げることはできないと述べており、沙紀をどうしてやることもできずに悩んでいることが分かる。

次に挙げるのは沙紀が加納にキスを迫った場面である。

「あなたは自分の恋人と同じことをしたいだけでしょう」  
彼女は静かに涙を流したまま首を振った。



「あるいは、僕が別れた恋人を今でも大切にしているのがうらやましいだけだ」

「君はこんなときでもそういうふうに正しいことを言うのね」

そう言った沙紀さんの言葉にはかすかな悪意が感じられた。それが本当は僕に対するものではないにしろ、弥生ちゃんの部屋で過ごしていたときの穏やかな沙紀さんと今の彼女はまったく遠いところにいるように感じられ、そのことが僕は哀しかった。

「僕はあなたにまで不誠実人間になってほしくないんです」

「あなたは今までに誰かに対して不誠実になったことは一度もないの」

「ありません。その代わりに、そこまで愛憎がごっちゃになるほど誰かを好きになったこともないけれど」

「……」

僕はもっと沙紀さんに違う言い方をするべきだったのかも知れない。それから真琴のことを思い出し、そんなことを考えていると次第に自分の価値観や良心が歪んだもののように感じられた。

加納は結局、自分の信念を曲げなかったことで、自分に救いを求めている沙紀を救うことはできなかった。そして、正しいことばかりを言っただけで自分の感情のままに行動しようとしないうちに自分に対し、それでいいのかと悩み始めている。

次に挙げるのはその悩みを真琴に打ち明ける場面である。

「「……」分かってるように見えて、本当は全然分かっていなかったり、それに分かっていても外側から見ようとするばかりで、自分

の感情で動いたり衝動に任せたりすることはできないから」

「べつにいいじゃない。だいたい衝動的で感情的なんて、そんなの加納君じゃないよ。もともとの性格っていうものがあるんだから、なにも感情を剥き出しにすることばかりが人間じゃないよ」

真琴はくだけた調子で一氣に言ってから、笑った。僕も思わずつられてほほ笑んだ。

「そうだね。自分らしくないことを無理にする必要はないよな」

自分に足りない部分があることに悩んでいる加納に対し、そのままの自分を受け入れるようにと励ます真琴の姿が見られる。

このように「屋根裏から海へ」では、真琴の言葉のおかげで、そのままの自分を受け入れられるようになった加納の姿が描かれている。

## ⑥「新しい旅の終わりに」(『ウフ』二〇〇五年一月号)

再び真琴が語り手となる。

真琴は加納と旅行に行くことになる。しかし真琴は、加納と二人で話しているときでも別れた恋人・哲との思い出が蘇ってしまい、そのことに苦しむ。そのことを打ち明けられた加納は、無理せず ゆっくり進んで行こうと言う。真琴は、自分を責めることなく励ましてくれる加納に対し、心から感謝するのだった。

真琴が哲との思い出を加納に話した後次のような場面がある。

「ごめん、さっき、もう話はしないって言ったのに」

「……」

「いいんだ、そういうのはぜんぶ分かっている、誘ったんだから」  
「本気で言ってるの？」

私は驚いて、彼の胸の中からこもった声を出した。

「うん、僕は君とこんなふうには話ができる日が来て本当に嬉しいんだ。だからなにもあせる必要はないんだよ。ゆっくりいこう」

加納は真琴のことを肯定し、受け入れようとしていることが分かる。次の場面では真琴が加納に対する思いを述べている。

まっとうな人だと思った。ずるいことができなくて、正しさばかりで、意固地で頑固で、そのことに本当に救われていた。

「……」

「ありがとう」

はつきりした声で告げると、加納君はちよつと思議そうに

「どういたしまして」

なんとなくきよとした目でこちらを見た。私は首を横に振った。

「ありがとう」

今度ははつきりと怪訝そうな表情を見せた加納君に、私は、ありがとう、と何度もうくり返し続けた。

この場面では、ただ単に旅に連れてきてくれたことに対する感謝ではなく、前の恋人との思い出に囚われていた真琴を、否定することなく受け入れてくれたことに対して「ありがとう」といっていることが分かる。

「屋根裏から海へ」では過去の思い出に囚われ苦しむ真琴が、そのま

まの自分を受け入れてくれる加納に救われるようすが描かれている。

# ⑦「夏めく日」(『ダ・ヴィンチ』二〇〇四年四月号)

ここでは瑛子の妹が語り手となる。

高校生の佐伯は、石田先生につきあい図書館にやってきた。そして今年の夏に結婚する石田先生に対し、手をつないで一緒に図書館の中を歩いて欲しいとお願いする。その後、先生の婚約者である片倉先生を、黒板消しにカッターの刃を忍び込ませることによって傷つけたのは長井だったと石田先生に伝える。先生と別れた後、片岡先生を傷つけることを長井に提案したのは自分だということを伝えたなら、自分は石田先生にとってまじめなだけの生徒から抜け出せるのだろうか、と考えるのだった。

短編中で、佐伯は石田先生にマジメな生徒だということをしばしば指摘される。

「いいよ。佐伯はいつもマジメでえらいから」

そう言われて胸の奥がかすかにきしんだ。

「先生」

よく冷えたサイダーの缶は水滴がびっしりについて指先を濡らした。どこもかしこもびしょ濡れだ、そう心の中で思いながら缶のプルタブを開けた。

長井さんにカッターの刃を貼るように提案したのが本当は私だと知ったら、石田先生はどんな顔をするのだろう。

そのときこそ私は、あなたの好きでも嫌いでもないマジメな生徒たちから抜け出すことができるのでしょうか。

佐伯は先生にとって「好きでも嫌いでもないマジメな生徒」から抜け出したいと考えていたことが分かり、石田先生にとって特別な存在になりたいという思いがあったことが読み取れる。そういう感情に区切りを付けるために、佐伯は先生に「手をつないで図書館を歩いて欲しい」と頼んだのだ。

「気は済んだか？」

廊下を歩き始めたときには、もう何事もなかったかのような顔で石田先生は笑っていた。私は困惑して黙ったまま足下を見ていた。

気が済んだかと問われればハイとも言えるし、そもそも最初から気なんか済ませられるものだったのだろうか。そんなふうにも感じた。

結局、手をつないで歩くという行為が終わった後も佐伯は自分の気持ちに区切りをつけることができなかったことがこの場面から分かる。

佐伯が石田先生のことを好きだと述べることは一度もなく、むしろ「べつに先生のことが好きなわけじゃないです」とさえ言っている。しかしその行動や思考を辿ると明らかに好意を抱いており、複雑な想いがそのような矛盾を生み出していると考えられる。相手は教師で、しかも今年の夏には結婚する男性である。佐伯が片岡先生を傷つけようとしたり、「マジメ」という言葉に突っかったりするのは、絶対に自分の思いが受け入れられることはないのだということに対する苛立ちとやり場のない

気持ちに渦巻いているためではないだろうか。

「夏めく日」では、受け入れてもらえない自分の感情を、持てあましてつもどろにかケリをつけようとする佐伯の姿が描かれていると言えるだろう。

### 【3】

『一千一秒の日々』において描かれたのは一見すると恋愛の悲喜こもごものようだが、この連作短編を貫いているのは、不完全な自分を受け入れられるかどうか、また他者を受け入れられるかどうかというテーマである。

そのままの自分を受け入れ、前に進んでいくことをお互い決意することができた真琴と加納。人と付き合うことに不安を感じ、自分を「不完全」だと述べる瑛子を、そのまま受け入れようとする遠山。コンプレックスで人を信頼できなくなっていた針山を好きだと言いつづける一紗。近くにいる、本当の意味で分かり合うことはできなかった長月と操。受け入れられることのない自分の気持ちをどうにかしようともかく佐伯。全編を通してさまざまな形の恋愛が描かれているのだが、それは決して恋愛の楽しさを伝えるものではない。むしろ、恋愛を描くことよりも、そこにある人と人とのつながりを丁寧に描き出しているのである。

「屋根裏から海へ」の中で印象的な場面がある。加納が真琴のことを「胸の中に押し寄せていた後悔も憐憫も懐かしさも一瞬かき消され、僕は初めて彼女のことを友達でもなく恋人でもない位置から見ている」と述べる場面である。このとき加納は「初めて真つ正面から真琴の顔を見たような気がした。」と言っている。また、「七月の通り雨」の中で「柵に並んだ本の腰巻きにはどれも恋愛小説という文字が唯一の取り柄のよ

うに大きく印刷されている。」と述べられる部分がある。これは『一千一秒の日々』が単なる「恋愛小説」ではなく、あくまで人と人とのつながりの中で自分や他者を受け入れられるかどうかというテーマを持っていることを示している部分だとは言えないだろうか。

『一千一秒の日々』は島本理生の作家性がよく表れている連作短編集だ。単なる「恋愛小説」で終わらず、人と人とのつながりを恋愛という形を使って描き出し、分かり合うことの難しさや、その尊さを教えてくれる。この特徴は島本の他作品にも常に表れている。青山純一が、島本の作品がいつも問いかけていることとして挙げた「孤立した個体ではなく多様な関係と性を持つ人間として、しかし社会の一般性が要求するのとは別なリズムで、私たち現代人にはいかなる性的な成長が可能か」という問題は、人と人とのつながりの中で自分や他者をどう受け入れていくか、という『一千一秒の日々』のテーマにも関連していく問題である。島本理生はさまざまな恋愛の形を通して人と人とのつながりを描く作家なのである。

※本文引用は、島本理生『一千一秒の日々』（角川文庫 二〇〇九年二月二十五日）による。